University WEB Magazine

中・高・大学進学の今を読む

サンプル版
Vol.000

大学選びの道しるべ

東大『秋入学』はうまくいくのか

森上教育研究所
大学情報研究会

Keywords & Contents

01 選ぶ基準も様変わり

大学選びの道しるべ

大学進学率は5割を超え、2人に1人が大学へ進学する時代となりました。さらに、短大・専門学校等を含めた高等教育機関への進学率は約8割に達しようとしています。大学院への進学率も上昇し、理系の専門職に就くためには・・・

02 東大よ暴走するな

東大『秋入学』はうまくいくのか

1月18日、日本経済新聞が朝刊トップで秋入学の中間発表を掲載しました。正直、7月に同じく日経が東大の秋入学を初めてトップで報道した内容からあまり進展していないという印象を持ちました。「中間まとめ」の発表を・・・

02 コンテンツ2

小見出し

リード文

ダミーテキスト

■□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□

02 コンテンツ4

小見出し

リード文

ダミーテキスト

■□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□

選ぶ基準も様変わり

～はじめに～

大学進学率は5割を超え、2人に1人が大学へ進学する時代となりました。さらに、短大・専門学校等を含めた高等教育機関への進学率は約8割に達しようとしています。大学院への進学率も上昇し、理系の専門職に就くためには学部4年＋大学院2年の計6年間の学習があたりまえになりました。6年制の医・歯・薬・獣医学部はもとより、法科大学院、教職大学院など、専門教育の6年制化の流れは今後も続くでしょう。

一方、大学を取り巻く環境は、年々厳しさを増しています。少子化のもと規制緩和と国の補助金等の削減により、大学は自由競争の時代に突入しました。

優秀な学生を獲得するためには、さまざまな改革が必要になります。まずは、将来のニーズを見すえて大学の教育内容や組織を改革しなければなりません。次に、マーケティング戦略に基づく学生募集・広報活動が必須になりました。こういった意味では、大学教育はサービス業化が進んでいるともいえます。

受験生および保護者が志望校を選ぶ基準も様変わりしました。極端にいってしまえば、一昔前は偏差値と入試科目で受験する大学を決めていましたが、今は学費・奨学金などのコスト面や、就職状況などの情報をよりシビアにみるようになりました。

大学選びの道しるべ

いまや、WEB上に大学の情報はあふれています。さらに、受験情報誌だけでなく一般の雑誌でも、大学受験の特集が組まれる機会が増えています。また、2011年度から大学の情報公開が義務化されたこともあり、入試や教育に関する情報だけでなく、財務などの経営に関する情報も公開されています。受験生や保護者の皆さんにとって、むしろ情報が多すぎて困惑するほどの状況ではないでしょうか。

本コラムでは、最新の大学入試に関する情報や、大学関連のニュースやキーワードの解説などを、コンパクトにまとめ、月2回のペースで提供する予定です。情報の奔流に飛び込まざるをえない受験生や保護者の皆さんにとって、本コラムが、大学選びへの道をしめす確かな『道しるべ』となることができれば幸いです。

東大よ暴走するな

1月18日、日本経済新聞が朝刊トップで秋入学の中間発表を掲載しました。正直、7月に同じく日経が東大の秋入学を初めてトップで報道した内容からあまり進展していないという印象を持ちました。「中間まとめ」の発表を、日経1社にリークして大きく扱ってもらうという点からしても、東大執行部の手詰まり感が伺えます。

その後、新聞各社は競うようにしてこの秋入学を報道しています。日経もさらに大学にアンケートをとって大学の「賛意」を求めました。大学には何通も同じようなアンケートが来たとか。文部科学大臣も内閣総理大臣も、そして経済界も、両手を挙げて賛意を示すという、ちょっと珍しい光景が繰り広げられています。東大執行部の手詰まり感を打開するためのフォローアップとも受けとれるほどです。

アンケート結果も賛意を示す大学を大きく報道して、賛意を示さないとまずいのではないかという雰囲気が作られました。この短い時間で、教授会に諮ることもできないですから、事前に相談を受けていたところ以外はまともに検討をしているわけではないにもかかわらず、アンケートで迫るのはいかがなものかと思います。

私の周りにいる大学関係者たちは、この大騒ぎに「賛意ばかりで本当にいいのか」と違和感を感じていました。マスコミも「誰かこの秋入学賛同騒ぎに正面から異論を唱える人はいないのか」といった問い合わせもありました。

東大「秋入学」はうまくいくのか

そこに1月30日に発売された「AERA」が「東大よ暴走するな」を特集しました。

やっとここで、大学は必ずしも「両手を挙げてではないぞ」と報道。新聞の即時性を求める報道に、週刊誌は関係者にじっくりとインタビュー。一つのテーマに紙面の多くを割けない新聞に対抗するかのように、AERA では学長アンケートの「秋入学の影響についての自由回答」部分を掲載して、それぞれの大学が秋入学に持つ懸念なども扱いました。この記事を読んで、学長らの見識を確認して、少し安心しました。「東大に同調する」と編集部のアンケートに回答したグループであっても、どこかの総理や大臣のように両手を挙げて「いいぞいいぞ、いけいけどんどん」なんて軽いことは考えていないようです。

例えば「東大に同調する」グループの東北大学は秋入学の影響について「高校との接続、国家試験、就職、ギャップタームの有効利用のあり方が課題」としています。同じく九州大学は「企業の新規採用時期や各種国家試験の時期等、課題はあるが、大学の国際化の進展やグローバル人材の育成など、メリットのほうが大きいと考える」としており、「総論賛成、各論まだまだ」というところではな

東大よ暴走するな

ないでしょうか。

記事では、早稲田大学の内田勝一副総長、滋賀大学の佐和隆光学長、京都大学の松本紘総長らにもインタビューをしており、なかなか味のあるコメントを引き出しています。

早稲田は既に秋入学の実績もあり年間1千人の学生を海外に送り出しています。これは奥島孝康総長時代に海外提携大学を大きく増やしたことがベースとなり、国際教養学部の設置で海外への留学を積極的に推進してきた証でしょう。東大の学部生はわずか53人しか海外留学をしていないことをAERAではあわせて紹介して「グローバル教育の推進において「周回遅れ」である東大が大きな顔をして国際化の旗を振っている、という冷ややかな考え方もできる」と手厳しいです。

佐和学長は「9月入学で日本人留学が増えるというのは、見当違い」「若者の内向き志向ではなく実力不足」とさらに厳しい意見。

松本総長は「入試時期だけではなく、入試制度改革の問題」としています。

（松本総長の秋入学に関する考えの詳細は、私が編集委員を務める「大学ジャーナル」HPをご覧ください。）

そして、この東大の秋入学について、私とまったく同じ意見を持っている大学の「自由回答」がありました。

「高等教育を中心に抜本的で徹底した改革を行うべきという決意が、連鎖的に入学者選抜方法と教育内容を変革していくトリガーになる期待は大きい。しかし、単なる秋入学への移行のみでは、一部学生の留学促進効果だけで終わってしまう懸念もある」（早稲田大学）です。

さて、このように東大の秋入学には異論があります。「中間まとめ」にもあるようにメリットもあればデメリットもあります。

東大も明治時代は秋入学でした。それを会計年度による合理性で4月入学に変更した経緯があります。秋入学そのものは臨時教育審議会で検討をされ、その後、教育再生会議でも検討されています。早稲田に限らず、国際基督教大学、慶應義塾大学など幾つかの大学では既に実施されているものです。

なぜ、東大は「秋入学」の実現を目指すのでしょうか。

次回は、「なぜ」といった視点に立って、東大秋入学を考えてみたいと思います。

2012・2・4　後藤健夫

東大「秋入学」はうまくいくのか